

# フランス語における代名詞文について

川 島 浩 一 郎\*

## I. はじめに

動詞を述辞とする発話を動詞文 (phrase verbale), 動詞が述辞でない発話を非動詞文 (phrase non-verbale) と総称する<sup>1)</sup>. そして(1)の rien, (2)の personne, (3)の moi や(4)の toi のように, 代名詞を述辞とする非動詞文を, 特に代名詞文 (phrase pronominale) と呼ぶ.

(1) - Qu'est-ce que ça aurait changé ?

- Rien, rien pour nous. (F. Sagan, *Un certain sourire*, Collection Le Livre de Poche, 1956, p.103)

(2) Il grimpa les trois marches et inspecta la pièce principale. *Personne*.

(M. Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.215)

(3) - Qui fera les voix?

- Moi, bien sûr. (J. Anouilh, *L'Alouette*, Collection Folio, 1953, p.15)

(4) Je n'ai jamais vu une voiture comme celle-ci, et toi ? (D. Etchison,

*Rêves de sang*, Collection Le Cabinet Noir, 1998, p.198)

---

\* 福岡大学人文学部准教授

本稿の目的は、代名詞文の成立基盤を、統辞的な観点から分析することである。論述の手順は次の通りである。Ⅱ.でまず統辞的な意味での「従属 (subordination)=限定(détermination)」を定義し、Ⅲ.で「統辞機能 (fonction syntaxique)」を定義する。Ⅳ.では代名詞の統辞的ステイタスを確認する。Ⅴ.で内心構造 (construction endocentrique) と外心構造 (construction exocentrique) を定義する。そしてⅥ.では、代名詞文の成立と内心構造・外心構造との関連を記述する。内心構造・外心構造という区別が一般に、非動詞文の成立基盤と密接な関係にあると思われるからである。

## Ⅱ. 「従属」の定義

文を構成する諸要素（記号素や連辞など）は、必ずしも互いに同等の統辞ステイタスを持っているわけではない。

- (5) *Une 606 bleu nuit* était garée dans l'allée [...]. (B. Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.65)

(5)の *une 606 bleu nuit* はある色合いの自動車 (606) であり、*bleu nuit* は深みのある青色 (bleu) である。*une 606 bleu nuit* において 606 が中心的であるのに対して、*une* や *bleu nuit* は周辺的である。また *bleu nuit* において *bleu* が中心的であるのに対して、*nuit* は付随的である。言語にはこのような中心性と周辺性、つまり階層性が絶対に必要である。さもないと、言語表現のほとんどが語彙の単純な羅列でしかありえなくなってしまう。たとえば *une 606 bleu nuit* の四つの記号素の意味関係は、「単一性+自動車+青色+夜」のような概念の平板な並置から想像や連想によって組み立てるしかないことになる。このタイプの伝達手段に限界があることは明白である。

一方が中心的で他方が付随的な統辞関係を「従属」あるいは「限定」と呼ぶ、より明確に定義すれば、次の三つの条件が満たされるとき、XはYに従属すると言われる<sup>2)</sup>。i) Xの出現がYの存在に依存する<sup>3)</sup>。ii) Xの付加がYの統辞的ステイタスに本質的な影響を与えない。iii) 発話の他の部分 (le reste de l'énoncé) に対してXが持つ統辞関係が、Yのそれとは異なる。

- (6) Chut, tais-toi. (F. Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.167)

たとえば(6)において、非接辞（強勢形）代名詞の toi は、動詞の tais に従属している。この toi の出現は tais の存在に依存する。実際(6)から tais を消去すれば、それにともなって toi も(6)から姿を消す。また toi を付け加えることは、(6)における tais の統辞ステイタス（述辞）に本質的な影響を与えない。そして toi と発話の他の部分との統辞関係が、tais と発話の他の部分との統辞関係と異なることは自明である。

- (7) [...] et il s'enferme *chez lui* pendant des semaines. (*Les jeux de l'amour et de la mort*, p.17)

(7)において chez と lui の間にある統辞関係を、従属とは呼ばない。確かに chez の出現はある意味では lui の存在に依存しているし、逆に lui の出現もまた chez に依存している部分がある。しかしこれは単なる依存関係ではなく、chez を付け加えることは、lui と発話の他の部分との統辞関係に本質的な影響を与える。従属という概念は階層性を明確化するためのものである。一方が他方のステイタスに影響するような関係を従属に含めるべきではない。

- (8) *Toi et moi* savons que le pire n'a pas de limites. (A. H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.72)

(8)において *toi* と *moi* の間にある関係も従属ではない。これらは *savons que le pire n'a pas de limites* に対して同じ統辞関係にある。このように発話の他の部分に対して同一の統辞関係を持つものは、従属ではなく等位関係 (coordination) にあると言われる<sup>4)</sup>。等位関係にある諸要素は互いに同じ階層にあるのだから、従属とは別物である。

- (9) *Lui*, bien sûr, travaille dur dans la firm de son beau-père. (*Les jeux de l'amour et de la mort*, p.119)

- (10) J'aime Gabriel. Je ne voulait que *lui*. Je ne désirais que *lui*. (*Elle*, 18 avril 2005, p.188)

- (11) *Il* le connaît depuis longtemps. (*Elle*, 25 avril 2005, p.142)

- (12) *Allez, vas-y, entre, [...]*. (G. Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.268)

主辞は動詞に、統辞的に従属する<sup>5)</sup>。主辞機能は動詞がなければ現れないが、動詞は述辞に特化した記号素であるから、主辞がなくても述辞である。(9)において *lui* (非接辞代名詞) は主辞であるが、(10)のように他の統辞機能 (直接目的) を担うこともできる。またもし動詞がなければ、*lui* は主辞ではありえない。そして(11)の *il* や *le* のような接辞代名詞は、原則的には動詞がなければ現れない従属的な要素である。

他方、動詞記号素である(9)の *travaille* や(10)の *voulait* は、従属節中でない限り、述辞としてしか使うことができない。そして動詞は、たとえ名詞主辞や接辞的な主辞代名詞がなくても、(12)のように命令文の述辞として使うこ

とができる。

(13) *Comprends pas, [...]. (Les jeux de l'amour et de la mort, p.168)*

(14) *Elle n'aimait pas ce type. Vraiment pas, et s'en méfiait. (La saison barbare, p.242)*

主辞の有無は、動詞の発話の他の部分に対する統辞関係に本質的な影響を与えない。確かに主辞が欠ければ全体が文として不完全になることが多いが、動詞が（従属節でない限り）述辞としてしか使えない記号素であることは変わらない。実際(13)や(14)のように、形態変化に痕跡は残るが、主辞は表明されないことがある。端的に表現すれば、主辞は動詞に対する義務的な従属要素である。

### Ⅲ. 「統辞機能」の定義

「統辞機能」に定義を与える。統辞機能は従属関係を前提にする。統辞機能は発話の一部（記号素、連辞、連辞素など）が、発話の他の部分に（統辞的に）従属する場合にのみ生じる。従属することが、統辞機能を持つことの定義であると言い換えてもよい。

(15) *Je peux passer ma commande ? (M. Levy, Et si c'était vrai..., Collection Pocket, 2000, p.78)*

(15)において、不定詞句である *passer ma commande* の統辞機能は、動詞記号素の *peux* に従属することによって生じる。つまり *passer ma commande* は *peux* に従属するという統辞機能（直接目的）を持つ。一方 *peux* はこの文の他の部分に従属せず、述辞として「そこにある」だけで、それ自身に明確な

統辞機能を担っていない。同様に所有形容詞の *ma* は、*commande* という名詞に従属することで統辞機能を担う。しかし *ma commande* の内部において *commande* に明確な統辞機能はなく、名詞句の中心として「そこにある」だけである。*commande* の統辞機能は、この連辞の外部に対して働く。つまり *commande* の統辞機能（直接目的）は、*ma commande* という連辞全体の中心部分として *passer* に従属することによって生じる。

(16) *Je veux dire, tu... sors avec elle ?* (M. Chattam, *Le 5<sup>e</sup> règne*, Collection Pocket, 2003, p.29)

(17) *L'homme lui déchirait le bras et il pensa que son épaule allait partir avec.* (*Les jeux de l'amour et de la mort*, p.161)

(16)において *avec* も *elle* も、それぞれ単独では明確な統辞機能を持たない。これらが統辞機能を担うのは、*avec elle* という連辞全体が発話の他の部分（直接的には *sors*）に従属するからである。確かに *avec* は *elle* がこの文に組み入れられるという統辞現象において、何らかの役割を担っている。しかしこの働きは、*avec elle* が(16)で担っているような明確な統辞機能とは別物である。*avec* が明確な統辞機能を持つケースには、たとえば(17)がある。(17)の *avec* は、単独で発話の他の部分（直接的には *partir*）に従属している。

(18) *Grace regarda Sam.* (*Sauve-moi*, p.319)

(19) *Que puis-je pour vous ?* (*Le sang du temps*, p.101)

(18)の *Sam* が持つ統辞機能（*regarda* の直接目的）は、主辞である *Grace* との相対的な位置関係によって表示される。(19)の *pour* と *vous* の統辞関係は、(18)における *Sam* とその「位置」の間にある統辞関係に近い。(18)の

Sam がそれに相応しい位置で regarda に従属することによって特定の統辞機能を担うのと同様に, (19)の vous は pour を伴って puis に従属することで所定の統辞機能を獲得している. 表意単位と結びつかない限り「位置」には統辞機能がないのと同様に, (19)の pour に積極的な統辞機能はない. (18)において Sam とその「位置」がいわば一体化しているのと同じく, (19)の vous は発話の他の部分に従属するために, pour と一体化していると考えなければならない.

(20) Jeremy déglutit *difficilement*. (*Le sang du temps*, p.163)

(21) Toute tremblante, elle se leva *avec difficulté* [...]. (*Sauve-moi*, p.193)

実際, (20)における *difficilement* の déglutit に対する統辞関係は, それが従属であるという点で, (21)における *avec difficulté* の (se) leva に対する統辞関係にほぼ等しいと考えてよい.

(22) [...], *sciences et spiritualités* ne font généralement pas bon ménage. (M. Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.35)

(22)において font の主辞機能を受け持つのは, *sciences et spiritualités* という連辞全体である. *sciences* と *spiritualités* は, この連辞内部において互いに等位で結ばれている消極的な存在に過ぎず, 個別の統辞機能を持たない. 実際, 無冠詞名詞である *sciences* と *spiritualités* はそれぞれ単独では主辞として不完全である. *sciences* と *spiritualités* は発話の他の部分に対して同じ関係にあるというだけで, これらの間に明確な統辞機能はない.

等位関係にある諸要素は, 発話の他の部分に対して同一の統辞関係を持つ

(Ⅱ.を参照). つまり等位の定義の本質は関係の同一性にあり, それが文中でどのような働きをしているかという機能の問題からは独立している. この事実は等位が統辞的な関係ではあっても, 統辞機能と呼ぶべきものではないということを明瞭に示している.

(23) *Il faut faire vite, [...]. (Sauve-moi, p.164)*

一般に, 述辞 (prédicat) は発話の他の部分に従属せず, 従属関係がつくる階層構造の頂点に位置する. これは述辞の定義そのものである. そしてこのことが, 述辞を中心にまとまっている文全体が, 談話から統辞的に独立する基盤となっている. つまり統辞機能の不在は, 独立の可能性を意味することになる. 統辞機能が従属を前提条件とするのだから, 統辞機能の不在は逆に非従属性 (つまり独立性) を含意する. (23)の述辞である *faut* は発話の他の部分に従属していないが, このことは, *faut* を階層構造の頂点とする連辞全体 (*il faut faire vite*) が, 談話から統辞的に独立していることと同義なのである.

#### IV. 代名詞の統辞的ステイタス

接辞代名詞は, その出現が動詞の存在に依存する. つまり動詞に対する, 明示的な従属要素と考えてよい (Ⅱ.を参照).

(24) *Je ne pense à rien. (Les jeux de l'amour et de la mort, p.171)*

(25) *Tu veux un peu de jus d'orange ? (Funérarium, p.122)*

たとえば(24)の *je* や(25)の *tu* は, 原則的には, *pense* や *veux* のような動詞記号素がなければ現れえない記号素である.



- (26) Et *moi*, je pense le contraire, [...]. (*Sauve-moi*, p.219)
- (27) Je n'ai plus que *toi*. (Boileau-Narcejac, *Les victimes*, Collection J'ai lu, 1964, p.117)
- (28) Je suis folle de *lui*. (N. de Buron, *Chéri, tu m'écoutes?... alors répète ce que je viens de dire...*, Collection Pocket, 1998, p.13)
- (29) Elle revient à *elle*. (*Funérarium*, p.306)
- (30) Fais-*moi* un café. (*Sauve-moi*, p.378)
- (31) *Eux* étaient différents. (*Le sang du temps*, p.371)
- (32) *Lui* a refusé. (*Le sang du temps*, p.430)

一方, *moi* や *toi* のような非接辞的な (強勢形) 代名詞は, その出現が必ずしも動詞の存在に依存しない。しかし(26)から(32)に見られるように, 非接辞代名詞もまた, 発話の他の部分に対する従属的な要素として現れることが多い。(29)の *elle* (強勢形) は, *revient* に従属する *à elle* の一部分であるし, (30)の *moi* は *fais* に対する従属要素である。

- (33) Et merde ! *Moi* qui pensais avoir cinq ans devant moi pour arriver à mes fins ! (A. Nothomb, *Robert des noms propres*, Collection Le Livre de Poche, 2002, p.115)
- (34) Alors *toi* aussi! [...]. *Toi* que je croyais mon amie ! *Toi* qui me dois tout ! (A. Nothomb, *Antéchrista*, Le Livre de Poche, 2003, p.132)
- (35) Et voilà toute la bande... *Moi* qui vous ai cherché partout ! (N. A. Collins, *Appelle-moi Tempter*, Collection J'ai lu, 1999, p.85)
- (36) *Moi* qui ai vécu depuis presque deux décennies dans la haine viscérale de tout ce qui était marxisme-léninisme, de tout ce qui venait de l'Est ! (J. Sadoul, *Yerba Buena*, Collection J'ai lu, 1999,

p.7)

(37) - Lequel de vous deux est l'aîné ?

- *Moi, monsieur.* (J. Anouilh, *Becket*, Collection Folio, 1959, p.84)

(33)から(37)に見られるように、非接辞代名詞（強勢形代名詞）が述辞としての役割りを担うことがある。しかし、*moi* や *toi* 自体には統辞的な独立性は含意されていないのだから、このタイプの代名詞文の成立には、他の表意単位の存在や（VI.を参照）、文脈や状況による意味的な支えが必要となる。

(38) Il doit avoir faim. *Vous* aussi. (*Chéri, tu m'écoutes?... alors répète ce que je viens de dire...*, p.221)

(39) Pour ne rien vous cacher, *moi* aussi. (*La saison barbare*, p.236)

(40) Il n'a pas dit une parole. *Moi* non plus. (S. Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.83)

(41) - Mais je n'y connais rien !

- *Moi, non plus !* (*Elle*, 7 mars 2005, p.122)

(38)から(41)のように、*aussi* や *non plus* をともなった非接辞代名詞が、かなり安定した独立性を示すことがある。

(42) J'espère que tu me vois dedans parce que *moi aussi*, [...]. (*La prochaine fois*, p.251)

(43) Anita est rancunière. Vous le comprenez fort bien, parce que *vous aussi*. (*Chéri, tu m'écoutes?... alors répète ce que je viens de dire...*, p.165)

(44) Je souris à Diana parce que *je l'aime bien*. (B. Aubert,

*Transfixions*, Collection Points, 1998, p.47)

(45) Il faut croire que *si*. (*Sauve-moi*, p.160)

(42)の *moi aussi* や(43)の *vous aussi* は、従属節中に現れている。これは、*moi aussi* や *vous aussi* が、(44)の *je l'aime bien* や(45)の *si* に匹敵するような統辞ステイタスを持つ可能性を暗示している。

(46) *Lui aussi* observait la carte. (T. Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.150)

(47) *Eux aussi* regardaient la télé. (*Du passé faisons table rase*, p.127)

(48) Tu ne comprends rien *toi non plus* ? (F. Vargas, *L'homme à l'envers*, Collection J'ai lu, 1999, p.240)

ただし、(46)、(47)、(48)に見られるように、*aussi* や *non plus* をともなう人称代名詞は、発話の他の部分に従属する要素として用いることもできる。(38)の *vous aussi* や(40)の *moi non plus* のような代名詞文の統辞的な独立性は、基本的には低いと考えるべきである。*aussi* や *non plus* をともなう代名詞の独立性が相対的に高いのは、*aussi* や *non plus* が意味的に、文脈・状況の存在を前提とするからに他ならない。

(49) *Rien ! Personne !* Le nid était vide ! (B. Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*, Collection J'ai lu, 2002, p.65)

(50) Étrangement, ce fut leur vide qui l'alerta. *Rien*. (*La saison barbare*, p.127)

(51) Le bois de l'échelle craqua. Khalil se tourna vers la trappe. *Personne*. (*Le sang du temps*, p.270)

(52) Le matin, je ne mange *rien*. (*Elle*, 30 mai 2005, p.150)

(53) Il n'aime *personne*. (*Transfixions*, p.83)

(49), (50), (51)のように, *rien* や *personne* がかなり高い独立性を示すことがある。しかし *rien* や *personne* は一方で, (52)や(53)でのように, 動詞の従属要素として用いることもできる。 *rien* と *personne* が安定した独立性を示しうるのは, 統辞的な要因ではなく, 意味的な要因によると思われる。

以上, 代名詞の統辞的なステイタスを概観した。代名詞は基本的に, 発話の他の部分に従属する非独立的な記号素だと考えてよい。

## V. 「内心構造」と「外心構造」の定義

内心構造とは, 一まとまりで統辞機能を担いような連辞 (syntagme) のことである。外心構造とは, そのような可能性を持たない連辞を意味する<sup>6)</sup>。

(54) Vous avez *un petit ami* ? (*Sauve-moi*, p.71)

たとえば(54)において, *un* と *petit* は *ami* に従属している (I.を参照)。そして *un petit ami* という連辞全体は, *ami* を中心に一まとまりとなって (vous) *avez* に従属している。つまり *un petit ami* は一まとまりで統辞機能 (直接目的) を持つことになるから, 内心構造であると考えてよい (III.を参照)。

(55) Je trouve *votre métier passionnant*. (*Les victimes*, p.73)

(56) Soler ? Moi, je *le* trouve *plutôt gentil*. (*Les jeux de l'amour et de la mort*, p.109)

(55)において、*vosre métier passionnant* という連辞は一まとまりの統辞機能を担っていない。したがって *vosre métier passionnant* は外心構造である。このことは(56)のように、*le* と *plutôt gentil* が分離した構文の存在からも明らかである<sup>7)</sup>。

外心構造は、非動詞文の統辞的な成立基盤と密接な関係にある<sup>8)</sup>。

(57) *Charmant cet endroit, [...]. (La prochaine fois, p.70)*

(58) *Pas fou, le père. (T. Benacquista, La commedia des ratés, Collection Folio, 1991, p.56)*

たとえば(57)の *charmant cet endroit* は、まとまって統辞機能を担いような連辞ではない。したがって外心構造である。この連辞が、内心構造である *cet endroit charmant* よりも文としての独立性が高いことに注目しよう。

明確な統辞機能を持たない外心構造は、発話の他の部分に従属しないという否定的な性格を利用することで、内心構造に対して相対的に高い独立性を獲得する可能性がある(Ⅲ.を参照)。従属性と独立性はいわば反比例の関係にあるからである。非動詞文の成立には、この仕組みがかかわっていることが少なくない(Ⅵ.を参照)。

## Ⅵ. 代名詞文

本節では、内心構造・外心構造という概念(Ⅴ.を参照)を援用して、代名詞文の統辞的な成立基盤を分析する。

(59) - *Qu'est-ce que c'est ?*

- *Rien ! (La prochaine fois, p.20)*

- (60) *Personne n'a rien vu.* (Transfixions, p.166)  
(61) *Passe-les-moi.* (*Sauve-moi*, p.204)  
(62) *Quel âge tu as, toi ? Moi, j'ai 7 ans. (Chéri, tu m'écoutes?... alors répète ce que je viens de dire..., p.45)*  
(63) *Lui fumait ici, paisiblement, [...]. (Le sang du temps, p.361)*

たとえば(59)の rien のような単独の代名詞は、連辞ではないので、基本的には内心構造でも外心構造でもない。ただし、統辞機能を担いうるという点では内心構造的である。実際(60)から(63)に見られるように、代名詞には発話の他の部分に従属する潜在性がある。(59)のような、内心構造的な性格を持つ代名詞文の成立は、文脈・状況に意味的に依存していることが多い(IV.を参照)。

- (64) *Ce n'était donc que ça ? Rien de plus ?* (T. Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.369)  
(65) [...], cela peut intéresser les spécialistes, mais *personne d'autre*, ou presque. (R. Thom, *Prédire n'est pas expliquer*, Flammarion, 1993, p.129)  
(66) Je ne sais *rien de plus* que vous, [...]. (*Funérarium*, p.303)  
(67) Ça ne regarde *personne d'autre*. (*Rêves de sang*, p.109)

(64)の rien de plus や(65)の personne d'autre は、(66)や(67)に見られるように、内心構造である。統辞的な独立性が低いこれらの代名詞文の成立には、記号素の意味や、文脈・状況の支えが必要である(IV.を参照)。

- (68) *Il a travaillé comme un fou toute la journée. Vous aussi. (Chéri, tu m'écoutes?... alors répète ce que je viens de dire..., p.189)*

- (69) - Je n'ai pas envie de quitter Cannes. Ni Cannes, ni toi.  
- *Moi non plus*, [...] (*Un certain sourire*, p.75)
- (70) Tu n'aimes pas les fourmis, *moi non plus*. (B. Werber, *Les fourmis*,  
Collection Le Livre de Poche, 1991, p.299)
- (71) *Moi aussi*, j'ai de longs cheveux. (A. Nothomb, *Métaphysique des tubes*,  
Le Livre de Poche, 2000, p.72)
- (72) [...], je me mets à votre place, *moi non plus* je ne m'aimais pas. (F.  
Beigbeder, *Windows on the World*, Collection Folio, 2003, p.62)

(68)の vous aussi や(69)の moi non plus は, (71)や(72)において確認できるように, 内心構造である。内心構造の代名詞連辞は, 発話の他の部分に従属する可能性を持つものだから, 統辞的な独立性は低いと考えられる (V.を参照)。

他方, 明確な統辞機能を持たない外心構造には, 発話の他の部分に従属しないという消極的な性格を利用することで, 内心構造に対して相対的に高い独立性を獲得する可能性がある。代名詞文の成立にも, この仕組みがかかわっていることが少なくない。

- (73) Toi, tu crèveras ici. *Moi pas*. (T. Benacquista, *Malavita*,  
Collection Folio, 2004, p.267)
- (74) [...] ; enfin, mes deux collègues roupillaient, *moi pas*. (*La prochaine fois*, p.202)
- (75) Mon père considèrait la vie avec un désespoir tranquille. *Pas moi*. (Ph. Djian, *Crocodiles*, Collection J'ai lu, 1989, p.58)
- (76) Je crève de faim, Thomas. *Pas toi ?* (*Becket*, p.17)
- (77) Non, *pas ça* ! Tout ce que vous voudrez, mais *pas ça*. (*Yerba Buena*, p.69)

(73)から(77)に見られるように、代名詞文が否定表示の *pas* をともなっていることがある。これは外心構造である。たとえば(73)の *moi pas* という連辞は、発話の他の部分に一まとまりで従属しないという否定的な性格を利用することで、単独の *moi* よりも相対的に独立性が高くなっている (V.を参照)。

(78) *Et moi* qui avais confiance en vous ! (*Antéchrista*, p.131)

(79) Se livrer tout nu à ces brutes ! *Moi* qui ai la peau tellement fragile... (*Becket*, p.8)

(80) Oh ? *Et moi* qui espérais plus ou moins le trouver ici. (*Appelle-moi Tempter*, p.237)

(81) *Et puis, ça*. (S. Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.15)

(82) Il y avait des petits juristes poussiéreux dans tous les coins. Très ennuyeux. *Et toi* ? (*Un certain sourire*, p.14)

(83) Tu vois, j'ai tenu parole, *et toi aussi*. (*La prochaine fois*, p.250)

(78), (80), (81), (82), (83)でのように、代名詞(句)の前に等位接続詞が置かれることがある。このタイプの連辞は通常、一つにまとまった統辞機能を持たない。一般に A et B という等位関係の全体は、外部に対して内心構造である (II.を参照)。A と B はそれぞれ、内心構造でありうる。しかし et B タイプの連辞がまとまって発話の他の部分に従属することは、独立文との等位でない限り考えにくい<sup>9)</sup>。したがって、たとえば(78)の *et moi...* は外心構造だと考えられる。外心構造であるこの *et moi...* は、(79)の *moi...* (内心構造) と比べて、統辞的な独立性が相対的に高いと考えられる。

(84) *Toi, amoureux* ? De qui ? (*Malavita*, p.219)



- (85) *Un maître, moi ! (Les victimes, p.72)*
- (86) *Nous avons bu en silence. Elle, regardant la fin du feuilleton dans un silence religieux. Moi, plongé dans la contemplation de son profil. (La commedia des ratés, p.90)*
- (87) *Nous allons boire une petite rasade de vinaisse. Lui pour fêter on ne sait quoi, moi pour me donner du courage. (La commedia des ratés, p.121)*
- (88) *Je suis lasse d'avoir ma vie encombrée par cet homme. Toujours lui ! Toujours lui ! (Becket, p.142)*
- (89) *Je m'etirai. Lui de même. (Crocodiles, p.120)*

(84)から(89)に見られるように、代名詞に、代名詞文の全体が外心構造となるような従属要素が加わることがある。たとえば(84)の場合、*toi*に*amoureux*を加えた*toi, amoureux*全体は、発話の他の部分に従属する可能性を含意しない。つまり*toi, amoureux*という連辞は外心構造である。同様に、(85)の*un maître, moi*も外心構造である。これら外心構造の代名詞文は、内心構造である*un maître*や、内心構造的な性格を持つ*moi*や*toi*と比べて、相対的に独立性が高いと考えられる。

以上、代名詞文と内心構造・外心構造との関連について考察した。全体が内心構造の代名詞文の場合、統辞的な独立性は低く、独立文としての成立は語彙的な傾向や、文脈・状況に意味的に依存することが多い。一方、全体が外心構造の代名詞文は、明確な統辞機能を含意しないという消極的な性格を利用することで、内心構造に対して相対的に高い統辞的な独立性を獲得する可能性がある。

## VII. まとめ

本稿では、代名詞文の成立基盤について、内心構造・外心構造という統辞的概念を用いて考察した。

- (90) *Agressif, moi !* (J. SADOUL, *Le sang du dragonnier*, Collection J'ai lu, 1996, p.129)
- (91) *Moi, une empoisonneuse ?* (A. Nothomb, *Mercur*, Le Livre de Poche, 1998, p.71)
- (92) *Conneries, tout cela, [...]*. (Manchette et Bastid, *Laissez bronzer les cadavres !*, Collection Carré Noire, 1986, p.37)
- (93) *Sans titre au dos, celui-là*. (*Appelle-moi Tempter*, p.68)
- (94) *Pas très imaginatif, ça !* (J. Carroll, *Collection d'automne*, Collection Pocket, 2000, p.158)
- (95) *Quelqu'un à te causer, tout simplement*. (*Du passé faisons table rase*, p.186)
- (96) *Eux, mentir ?* (*Du passé faisons table rase*, p.248)

内心構造は一般に、統辞的な独立性が低い。内心構造の代名詞文の成立には、語彙的な傾向や、文脈・状況の意味的な支えが必要である。それに対して外心構造は、(90)から(96)に見られるように、一まとまりの統辞機能を担わないという消極的な性格を利用することで、内心構造に対して相対的に高い統辞的独立性を獲得する可能性がある。たとえば(90)の *agressif, moi* (外心構造)は、単独の *moi* (内心構造的) や *agressif* (内心構造的) よりも、文としての独立性が高い。

非動詞文を構成する要素の中で、どの要素が述辞であるかの判断には微妙な

場合もある。文脈・状況や話者の意図によって異なることも考えられるし、結局は述辞の定義次第ということにもなりかねない。たとえば(91)において moi が述辞で une empoisonneuse はその従属要素であるのか、あるいは逆に empoisonneuseの方がこの文の述辞であるのかの判断は、必ずしも容易ではない。しかし、moi, une empoisonneuse という外心構造からどちらの要素が欠けても、この連辞全体の独立性は低下してしまう。moi にせよ empoisonneuse にせよ、動詞文における動詞記号素（述辞に特化した記号素）のような明確な述辞でないことは確かである。

統辞的な観点から明らかなのは、moi, une empoisonneuse 全体が外心構造だということである。述辞となる要素の性質も勿論重要だが、それ以上に、この非動詞文の成立は全体が外心構造であることに支えられていると言ってよい。つまり(91)において、従属関係がつくる階層構造の頂点に位置するのは、moi でも une empoisonneuse でもなく、moi, une empoisonneuse という連辞全体なのである。外心構造であることによって、全体が動詞文に匹敵するような統辞的独立性を獲得しうるのだから、非動詞文の内部でどの要素が述辞であるかという問題設定は、重要度が相対的に低いと考えられる。

#### [註]

\*<sup>8</sup> 本稿は川島（2002a）の第10章を、全面的に書き改めたものである。

- 1) 本稿では MEILLET らの伝統的な見解にしたがって、文を「統辞的に独立した発話」と定義する。MEILLET (1903) は文に次のような定義を与える。

A un point de vue purement linguistique, et abstraction faite de toute considération de logique ou de psychologie, la phrase peut être définie : un ensemble d'articulations liées entre elles par certains

rapports grammaticaux et qui, ne dépendant grammaticalement d'aucun autre ensemble, se suffisent à elles-mêmes. (MEILLET, 1903, p.326)

また BLOOMFIELD が文に与えた次の定義においても、独立性という概念は重視されている。

It is evident that the sentences in any utterance are marked off by the mere fact that each sentence is an independent linguistic form, not included by virtue of any grammatical construction in any larger linguistic form. (BLOOMFIELD, 1933, p.170)

- 2) 本稿での「従属=限定」の定義は、MARTINET (1985) による。
- 3) 従属(限定)にとって本質的なのは、それが依存関係であることである。  
(97) Je ne pense à rien. (*Les jeux de l'amour et de la mort*, p.171)  
依存関係の判別に曖昧さがあるように思えることがある。たとえば (97) において、à rien が動詞である pense に従属しているのか、あるいは rien が連辞素である pense à に従属しているのかの決定は、考え方にもよる。これは判定が曖昧な場合があるということに過ぎず、従属が本質的に依存関係であるという定義を変更する必要はない。
- 4) 等位の定義に関しては、敦賀 (1998) を参照。
- 5) 主辞が動詞に対する義務的従属要素であることについては、川島 (2006) を参照。
- 6) 内心構造と外心構造はもともと、分布主義的な枠組みで定義されてきた。すなわち、連辞 XY が X と同じ分布を示すとき、この連辞を内心構造と呼ぶ。そして XY が X と Y のどちらとも異なる分布を示すとき、この連辞を外心構造と呼ぶ。本稿では、この定義に修正を加えたものを用いている。内心構造・外心構造の定義に関しては、BLOOMFIELD (1933) と川島 (2002b) を参照。

- 7) 二次的叙述と外心構造の関連については、川島（2006）を参照。
- 8) 非動詞文と外心構造の関係について、TSURUGA（1978）は次のように指摘する。本稿の記述は基本的に、この考え方を代名詞文に適用したものである。
- rien, sous les arbres du jardin est exocentrique, ou tout au moins, moins endocentrique que rien de tel, par exemple. Nous pensons que les énoncés nominaux sans les dits "actualisateurs" spécialisés sont plus indépendants quand ils sont exocentriques que quand ils sont endocentriques. C'est justement cette exocentricité même qui offre une indépendance. Le cas de rien n'est peut-être pas très explicite à cause du signifié de rien (même pour le cas de rien, nous pensons d'ailleurs que rien, sous les arbres.. est plus indépendant que rien de tel ou rien). Mais le cas de fête, par exemple, est explicite. fête, ou une fête, ou une grande fête peut être difficilement indépendant, tandis que aujourd'hui une fête ou une grande fête parce que c'est la fin d'année paraît l'être. (TSURUGA, 1978, p.68)
- 9) 非動詞要素と動詞文の等位については、川島（2001）を参照。

#### [参考文献]

- BLOOMFIELD, Leonard (1933), *Language*, New York, Holt.
- 川島浩一郎（2001）「Une aspirine et ça passera 型構文と等位接続」『ふらんぼー』第 27 号，東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会，11-26.
- (2002a) 『フランス語の非動詞文研究』，博士論文，東京外国語大学.
- (2002b) 「内心構造，外心構造について」『ふらんぼー』第 28 号，東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会，39-57.
- (2006) 「二次的叙述をめぐる一考察」『ふらんぼー』第 31 号，東京外国語大

- 学フランス語研究室フランス研究会, 34-50.
- LEFEUVRE, Florence (1999), *La phrase averbale en français*, Paris, L'Harmattan.
- MARTINET, André (1985), *Syntaxe générale*, Paris, Armand Colin.
- MEILLET, Antoine (1903), *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris, Hachette.
- TSURUGA, Yoichiro (1978), *L'Autonomie syntaxique en français contemporain (sa contribution à la communication linguistique)*, thèse de doctorat de 3e cycle, Université de Provence.
- 敦賀陽一郎 (1998) 「等位接続と統辞機能」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』, 東京, 三修社, 204-215.